

情報文明の明日を考える

— ユビタキス社会における礼儀作法をめぐる —

坂村 健

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：先生とはもう長いお付き合いになりますね。私はコンピューターに関しては全くの素人ですが、今回先生に一つお伺いしたかったことがあります。最近では、個人情報というものがあるコンピューターを通じて一極に集中されていく傾向がありますが、私たち一般市民はそのことに非常に怖さを感じています。

坂村：そこには誤解があります。技術そのものの話と、技術をどう使っていくのかという戦略・方針の話は、全く別の問題なのです。例えば、情報は集中させることもできれば当然分散させることもできます。技術的にはどちらも可能なのですから。これらの話をこっちゃんにしてみると、コンピューター化したりIT化したりすることがそのままプライバシーの侵害につながると考えてしまいがちですが、それは非常に短絡的な考え方だと思います。

私のところでは超小型コンピューターを作っているのですが、ネイル・コンピューターになるとこれほどの小ささになります（写真）。このような超小型コンピューターを色々なものに組み込んで活用することを考えています。これを組み込み技術といいますが、コンピューターというみなさんはまずマイクロソフト社のWindowsなどを連想しますね。しかし、パーソナル・コンピューターというのは、マイクロ・コンピューターの世界ではほんの一部分に過ぎません。現在マイクロ・コンピューターの生産数というのは全世界で年間53億個にのぼりますが、そのうちパソコンはわずか1億3000万台弱、携帯電話でも4億5000万台ほどです。残りは、車のエンジンのコントロールや、DVD、デジタルカメラ、AV機器、ファックスなどに組み込まれているものです。それらを組み込みコンピューターと呼び、パソコンと違ってコンピューターが前面に出てくるものではないため、なかなかみなさんの頭には浮かびにくいのではないのでしょうか。私が20年前から行っている「TRONプロジェクト」のTRONとはこの組み込みコンピューターのことで、先ほど述べた53億個のマイクロ・コンピューターのうちほぼ半分がTRONベースで動いているということになります。

佐多：その延長に、今先生が研究を進めておられるユビタキス・コンピューター概念があるわけですね。



坂村 健 / さかむら けん

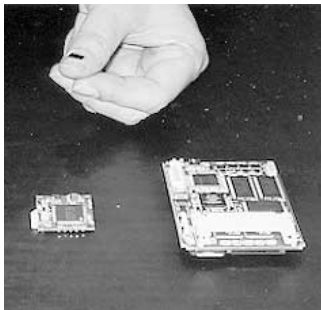
1951年、東京生まれ。79年、慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了。2000年より、東京大学大学院情報学環学際情報学府教授。84年からコンピューターの基本ソフト（OS）「TRON（トロン）」プロジェクトの開発リーダーとして世界の注目を集める。2002年に産官学協同でYRPユビタキス・ネットワーク研究所を設立、同研究所所長。2001年に武田賞受賞。著書に『ユビタキス・コンピュータ革命』『21世紀日本の情報戦略』『情報文明の日本モデル』『コンピュータ学』など多数。

坂村：そうです。ユビタキスというのはラテン語から来た英語で、「神はどこにでもいらっしゃる」という意味です。それにコンピューターをつけて、「どこでもコンピューター」というわけです。身の回りにある全てのものに超小型コンピューターを組み込み、裏側から人の生活を支えていこうという流れで、これはインターネットでもないパソコンでもない、全く新しい分野になります。この分野では日本が技術の先頭に立っているため、これからは他の先進国の後追いではなく、日本が独自のビジョンを打ち立てて進めていくことができます。

佐多：しかし、これだけ技術が進歩すると、やはりそれをコントロールする倫理とか哲学が今後ますます問われるようになってきますね。例えば、高速道路などにはカメラがついていますが、車のナンバーが究極に記録されているということを聞きます。フランスなどではそういうことは許されない問題として、非常に厳しく規制されているのですが。

坂村：コンピューターは単なる道具に過ぎません。ユビタキス・コンピューターに期待していることは、人間を助ける、つまり人間の知的作業を補うということです。人工知能（AI）という言葉が出てきたから誤解を招いているのかもしれませんが、コンピューターが人間の代わりをするとか、無機物で人間と同じものを作るといったことは、今の科学の力では無理だということが分かってきました。今の科学ではとてもではないが人間と同じものは作れない、それならもう少し人間を研究しようではないかということで、DNAや脳科学の分野の研究が活発になってきたのです。そういった研究の補佐をする上でも、コンピューターは大いに役立つと考えています。

しかし、確かに道具はその使い方によって諸刃の剣となります。だから、そういうことに対して議論が足りなければ議論をするという姿勢が必要です。ただ、それは技術の問題というより、もはや政治の問題だと思います。技術者が問題について関心を持たなくてよいと言っているのではなく、むしろそれは戦略や方針、政策の問題なのであり、民主主義国家なのでそれに対して一人一人がきちんと意思決定できる素養、そしてそれをきちんと議論しあう場や機会をもっと日本の中で作らないと、結局今のようになんか形で問題が噴出してくることになります。



佐多:湯川秀樹先生が戦後アメリカのプリンストン高等研究所を訪れた際、アインシュタイン博士が先生の手を握って泣いて原爆のことを謝罪したという有名なエピソードがあります。その後アインシュタイン博士を中心にPUGWASH(※)という、世界中の科学者でいかにして科学と技術が社会的責任ある方法で利用されるかを議論するという会が設立され、1995年にはノーベル平和賞を受賞しています。しかし、アインシュタイン博士がそうであったように、戦争という時代背景の下に原爆の開発に携わざるを得なかった多くの物理学者が、本心では自分たちの研究の成果が原爆という大量殺人兵器として使用されることは夢にも希望されていなかったのではないかと思います。このようなことが、コンピューター技術の世界でも起こらないとは言いきれないのではないのでしょうか。

坂村:確かにそうです。しかしここで話が戻りますが、やはり問題は、そういうことに関心を持たせるような教育制度や議論する場を設けない日本の仕組みにあるということです。特に教育です。現代の生活がいかに科学技術で動いているのかということを、小さなころから教えずにはいけないと思います。確かに文学や歴史、芸術などを学ぶことは豊かな人生を送るには必要なことだと思いますが、しかし科学を知ることとは、例えば遺伝子組換えの食べ物のことや、放射性物質はある一定量集めると臨界になるなど、直接生活のものにかかわってくるのです。街に出れば、さっきの高速道路の話もそうですし、それこそ銀行も携帯電話もコンピューターで動いています。まさに知らないと生きていけなくなります。緊急を要して教えていかなければならない問題だと思うのですが、今の日本の教育はそういった問題にきちんと対応できるようには必ずしもなっていません。まず私たちが意識や関心を持つことが重要なのです。

佐多:私は大分以前から会社で「情報道」というものを提唱し、社員にもマナーに気をつけるよう指導しています。剣道や茶道のように、日本人が情報倫理として「情報道」をきちんと守るべきではないかと。大げさかもしれませんが、パソコンを使う前にまず「悪いことには使わない」と誓うとか(笑)。そのように精神的な心構えを持つことは意味があると思いますし、やはりそうするには教育がまず大切という



ことになるのでしょう。最近では電車の中でもカメラ付き携帯電話で写真を撮っている人が多くて、自分もいつの間に撮られているのではないかと猜疑心や恐怖心を持っている方も随分いらっしゃるのではないのでしょうか。

坂村:新しい技術が出てくれば、必ず相反する使い方を考える人が出てくることは、それこそ「性善説」の世界でもない限りは仕方ないことだと思います。ただそこで必要になるのは、それをどう使うのかという私たちのコンセンサスと、そしてそれを守るためのルール作りです。

私はよく言っているのですが、ルール作りというのは、つまるところ日本をどうしたいのか、日本でどのような生活をしたいのか、日本の未来をどうしたいのかという日本の哲学があって、さらにその上に戦略を打ち立て、教育も含めどうしようかと総体的に、意識的に考えることだと思うのです。しかし日本はこの戦後50年、あらゆる分野でそういうことをあまりやってこなかったために、現在国民の間ではストレスがたまり、産業政策にしる色々な面で不満が鬱積してきているのだと思います。

戦後アメリカは戦勝国として誰に憚ることなく、自分たちでアメリカというものに対する哲学と方向性を決め、その内容がよいとか悪いとかは別として、その上にしっかりと戦略を打ち立てて実行してきました。アメリカではセキュリティーやプライバシーの問題でもある程度明確な答を持っていますから、きちんと説明ができます。日本の場合は説明できないことが多くて、いつの間になんか崩壊的にこうなってしまった、ということが多い。それでは私たちに不満がたまってきますよね。この問題は今後の大きな課題だと思います。

佐多:先生にはぜひユビキタス社会のマナーを考える会を率先して作っていただきたいですね。そして、そういう会を作るときはぜひ私も参加させてください(笑)。

(※)ラッセル博士とアインシュタイン博士が中心となって、湯川秀樹を含む東西の科学に呼びかけ、「ラッセル・アインシュタイン宣言」を機に1955年に結成。名前の由来は、第一回目の国際会議がカナダ東部の漁村PUGWASHで開催されたことによる。
参考URL <http://www.yc.musashi-tech.ac.jp/~syupugjp/index.html>

秋月禅学と私(2)

—「即今・此処・自己」の真実—

竹村 牧男

人の死に際して、よく断末魔の苦しみということが言われる。しかしこの言葉は正しくない。正しくは、断末摩の苦しみである。末摩とは、サンスクリットのマルマンの音写で、体中に400〜500あるというツボのようなもののことである。人が死ぬとき、それが断割されることがあるという。その非常な苦しみか断末摩の苦しみなのであり、けっして断末時に魔がやってくるというようなことではない。

第一、仏教では死を断末とは見ていない。人は死んでも存続して、輪廻していくと説いている。その説明には、2種類あるかと思う。一つは、四有の説である。生まれた刹那を生有という。その後の一生涯を、本有という。死の刹那を死有という。その後、次の世にどこかに生まれる間を、中有という。こうしてまた生有を迎え、その後の有が続いていくというのである。

死に際しては、光に出会うともいう。しかしそのことによって救われるわけではない。すでにそれまでの業（＝行為とその未来への影響力）によって、次の世には、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上のどこに生まれるかが決まっており、中有の間ですでにその次の世の生き物のかたちをしているという。しかしその身体は人間の肉眼には見えず、一方、その身体は物理的抵抗をも透過して行きたいところへどこへでも瞬時に行けるといふ。

中有の存在は、最長49日間とされている。少なくともこの間に、業にしたがって次の世に生まれていくというのである。四九日に、満中陰の行事が行われるゆえである。

もう一つの輪廻の説明は、十二縁起説である。これは、無明一行一識一名色一六入一触一受一愛一取一有一生一老死の12項目の縁起の関係によって、生死輪廻が続いていくと説くものである。今、このことについて詳しく解説するいとまはないが、ただこの説の主旨は、われわれの生死輪廻の苦しみの根本には、無明があるということである。人は誰でも、根源の無知とでもいうべきものを抱えていて、そのために自我に執着し、ものに執着して、その結果、輪廻してやまず、苦しみ続けるという。キリスト教では原罪をいうが、仏教はそこを無明という。仏教は、その無明を破れば、真実を自覚し、生死輪廻は止み、苦しみから解放されるという。

しかしながら、仏教は無我ということを説いてきた。一体、無我なの



竹村 牧男 / たけむら・まきお

1948年、東京生まれ。71年、東京大学文学部卒業。学生時代より秋月龍旺老師に参拝する。文化庁宗務課専門職員、三重大学助教授、筑波大学助教授、同大学教授を経て、現在、東洋大学文学部教授。筑波大学名誉教授。居士号・祖聖。著書に、『唯識三性説の研究』、『唯識の探求』、『親鸞と一蓮』、『良寛さまと読む法華経』、『西田幾多郎と仏教』など多数。

に、何が生死輪廻するのだろうか。生死輪廻には、自業自得ということも関係している。自ら作った業によって、その結果を自らに受けるのだという。確かに他者の業を引き受けるようなことになったら、混乱するほかないであらう。しかし、自ら自らにということを保証するものを、無我なのどこに求められるのであろうか。

この問題は、仏教にとって大問題であつたろう。仏教思想史上では、唯識の阿頼耶識の理論によって、この問題は解決に至ったかのようである。阿頼耶識（蔵識）は、意識下の世界であり、刹那刹那、生じては滅し、生じては滅しながら、無始より無終に相續されているという。そこに行為の情報が蓄えられ、伝達されていって、未来にその影響力が発揮され、生死輪廻が説明されるという。このことも今は詳しく解説するいとまはないが、無我ということと輪廻ということとを矛盾無く説明しようとする仏教の努力には大変なものがあり、ついに阿頼耶識の説でひとつの決着を見るに至ったのであつた。

今、述べてきたところからも知られるように、仏教では生死輪廻をどこまでも認めていた。釈尊がこの問題をどう見ていたのか、それは詳しく検討してみるべきだが、おそらく釈尊もこのことを認めたと思う。善因善果・悪因苦果の道理を認めない場合は、行為の基準が成り立たず、二ヒリズムに陥りかねないからである。ただし、この場合の善悪は、社会的倫理・道徳上のことではない。あくまでも無明を破るということにかかわる、宗教上のことにほかならない。

このような事情があるにもかかわらず、龍旺は生死輪廻などありえない、死後の世界は存在しないと、はっきり言明した。生死輪廻などといわなくても、仏教は立派に成立するというのである。その主張は、たとえば一世を風靡したその著『誤解だらけの仏教』（柏樹社）に明らかである。その断言は、仏教者としては、破天荒のものでさえあつた。

釈尊は、死後の世界について問われたとき、黙して答えなかったともいう。また、仏教では、常見と断見とを厳しく戒めている。常見は、

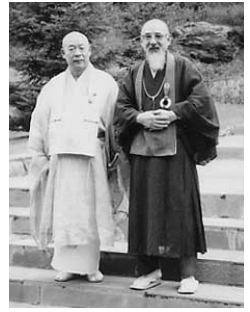
秋月 龍 珉 / あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒。同大学院修了。

宮田東三老師、古川亮道老師、宇坂光龍老師、大森曹玄老師に参拝。

埼玉医科大学教授、花園大学教授などを歴任。埼玉医科大学名誉教授。臨済正宗真人会師家として門弟を多数養成。月刊誌『大乗禅』主幹を長らく務める。禅道と禅学とを究め、さらに仏教学・宗教哲学の分野にも活躍した。宗教間対話の促進に努め、晩年は海外の国際学会などにも積極的に参加した。1999年、9月示寂。

著書に『秋月龍 著書集』全15巻、『道元入門』『公案—実践の禅入門』『新大乗—仏教のポスト・モダン』『禅とイエス・キリスト（対談集）』『世界の禪者—鈴木大拙の生涯』『誤解だらけの仏教』『現代（ポスト・モダン）を生きる仏教』『無心と神の国（対談集）』『絶対無と場所—鈴木禅学と西田哲学』など多数。



秋月龍珉老師（右）と嶋野榮道老師

自分が死後にも存続するという見解、断見は自己は死後には滅尽するという見解である。龍珉の説は、厳しく排除された断見なのではないだろうか。龍珉は外道に陥ったのではないだろうか。

しかし私は思う。龍珉は龍珉の仕方、で、仏教の見た真実を明かしていたのだと。

常見や断見は、辺見とも辺執見ともいわれる。それは自己を対象的に、常住・単一・主体なるもの（常・一・主・宰）と捉えて、そのうえでそれについて、死後も有るとか死後には無いとかいうものである。生死輪廻があるといわれて、その場合、対象化された自我が続いていくとみなすことがしばしばである。龍珉はそこを問題としていたのである。

大事なことは、真実の自己を自覚することである。真実の自己に目覚めれば、それがどこから来て、どこへ行くかもわかる。死後、どこへ行くかの問題もおのずから解決されるのである。では、真実の自己とは何か。それはまさに、「即今・此処」に生きている自己以外にない。意識の中に描かれた自己でもなく、観念の中に妄想された自己でもなく、まさに「いま・ここ」において働いている自己、それ以外にはないであろう。それは、主体そのものとしての自己ということである。すなわち対象的につかまえることのできないものである。したがって、ただ生きることでしか、その自己とひとつになることはできない。しかしただ生きることの中に、真実の自己は展開する。その自己にとって、死後のことなど、夢想のこと以外の何ものでもないであろう。人はどこから来て、どこへ行くのか。しかしわれわれは、今から今へと生きるものであり、そこをつかめば、生死の問題もかたづくのである。そこでは、道元の言うように、「生也全機現、死也全機現」(*)ということになる。

こうして、龍珉はその「即今・此処・自己」の真実を直指したかったがゆえに、生死輪廻などありえないと強く説いたのである。その発言は、関山禅師の「わが這裡に生死なし」という言葉と、軌を一にするものであった。

龍珉の代表作のひとつに『公案』の書がある。禅修行上の問題として課せられる公案の中の三十三則をとりあげ、巧妙に解説した貴重な書物である。そのどれもが「即今・此処・自己」のことを語って

いると言ってもさしつかえないが、龍珉が特にこの「即今・此処・自己」を見出しとして付したのは、「^{いさんすいこ}瀧山水枯」という次のような公案であった。

「瀧山靈祐禅師は、あるとき弟子たちに言われた、『わしは死んだら、門前の檀家に一頭の水牯牛になって生まれる。そしてその牛の脇の下に「瀧山の僧、靈祐」という五文字を書いておく。このときおまえたちは、この牛を何と呼ぶか？もし瀧山の僧といえ、それは水牯牛だ。水牯牛と呼べば、それは瀧山の僧靈祐だ。まあ、言うてみよ。いったい何と呼べばよいか』。そのとき高弟の仰山がみんなの中から出て、おじぎをして出ていった。』

さあ、その牛を何と呼べばよいのだろうか。龍珉は、「禅の修行は常に『いま・ここ・自己』が問題である。これを忘れると、公案がよそごとになり、せつかくの参禅がむだごとに終わる」と解説している。いくつもの公案体系を深く研究した龍珉は、いつもただひとえに「即今・此処・自己」において、本来、無相の自己が有相・有位にはたらくところを直指し続けたのであった。

(*) 生きるときは全力でその働き（機）を現し出せ、死ぬときは全力でその働きを現し出せという意味

すべては自分の一念で決まる

—患者体験談—

川根 一也

私は1981年の9月7日に、『両脛骨列欠損による両下肢機能の著しい障害』という名前の病気でこの世に誕生しました。それは、出産予定日より約3カ月も早く生まれたということが原因であったと考えられます。そのような状態で生まれてきたために、私の両足は不完全なまま障害という形になって現れました。また、約1,000gという超未熟児であったことから、「もう助からないだろう」という医師の判断により実家では私の葬儀の準備を行っていたそうです。しかし、家族みんなの「生きて欲しい」という強い祈りと、医師の方々の懸命な治療によりなんとか一命をとりとめることができました。それが私の生まれた時のエピソードです。

私の両足の症状について説明をしたいと思います。生まれつき左足は膝の皿と足のすべての関節がなく、足の指も2本しかありません。その上、膝と思われる箇所から足の甲と思われる箇所までが裏返り曲がっていました。右足は膝から下の骨は1本しかなく（通常は前に太い脛骨と、その後ろに細い腓骨の2本があります）、左足同様に裏返り曲がっていました。赤ちゃんの時にははいはいることもままならず、ほとんどの場合両腕を使って動いていたそうです。

2歳半の時に、現在も通院している「福岡市立こども病院」を紹介されました。当時歩くこともできなかった私は、体の隅々まで検査を受け、その後すぐに入院して障害のために裏返り曲がってしまった両足を元通りに戻す手術を受けました。足は見事にまっすぐになり、見違えるほどの姿となっていました。母は驚きのあまり喜びをとさに表現することができず、担当の主治医に「お母さんはうれしくないのですか」と聞かれたと、後日私にうれしそうに話してくれました。

私はほとんどと言っていいほど幼い時の記憶がないのですが、初めて立てて歩いたのはおそらく4、5歳の時だったと思います。病院の外で来で装具（義足）を両足に着けた時、私は母に突然「歩いていい？」と聞いたそうです。まだ両足で体重を支えて立つことも、歩行練習も、そのためのリハビリも受けていない私が歩けるとは誰も思っていなかったようでした。しかし、そんな中私が装具を着けてすたすたと5、6歩ほど歩いた時には、その場にいた先生や両親が



左から2番目が著者

川根 一也 / かわけ・かずや

1981年、福岡県生まれ。2000年、福岡高等学校を卒業。

現在、琉球大学に在学し、沖縄県にて一人暮らし。

みんな驚き感動に包まれたそうです。

保育園に行くようになった私は、家族の心配をはねのけるように毎日明るく元気に通いました。友達もたくさんでき、すぐに打ち解けることができました。最初、友達は私の足を不思議そうに眺め、誰もが必ず同じ質問を繰り返しました。そのような質問に答えることがつらいと思うこともありましたが、みんなは私についてなにも知らないから聞いてくるのだということに気づきました。それから、きちんとみんなに私の体について説明することで、次第にみんなは私ができることとできないことを見分け、温かい手を差し伸べてくれるようになりました。その時の友達に今も感謝しています。

小学校に入学するとまた新たな環境となり、新しい友達も増えました。私は特別扱いされたくないといつも考えていたので、できるだけ人の手を借りずに行動していくことに決め、積極的に授業、もちろん体育の授業にも参加してきました。私のその負けず嫌いな性格と明るい態度に、みんなの見る目も徐々に私が障害者だということを感じさせないほど普通と変わらず接してくれるようになりました。私はそのことがとてもうれしかったことを記憶しています。そのうち心の中で、次第に「私にもなにか人の役に立てることがあるのではないか」と考え始めるようになりました。そんなある日、母から「もしできなくても、そのことに挑戦するあなたの姿で、なにかまわりに訴えることができるんじゃないの」と言われたことを、今も鮮明に覚えています。それを自分なりに解釈し、「私が一生懸命にがんばることで、まわりの人に感動や刺激を与えることができる」と考えるようになりました。

そして、小学校2年生の時に、私自身初めてと言えるほどの長くつらい約300日間の入院生活を経験することとなりました。私は生まれつき両足に障害を持っているためにそれぞれの足の長さが異なっており、歩行することにも違和感を生じるようになっていました。そのため、当時の担当主治医が「後々のことを考えると、足の長さを合わせる延長手術を行ったほうがよい」とおっしゃり、私自身も日常生活において不自由な面も感じていたので、延長手術を受けようと思った。

初診時（2歳）

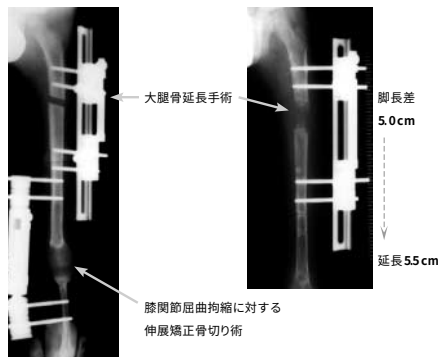


この手術は、まず始めに延長したい箇所の骨を切断し、数ミリ間隔を空けてその骨に直接ステンレスのボルトを2本ずつ計4本打ち込み、それに延長器具を取りつけ、自分で毎日0.2～0.3mmずつ伸ばしていくという非常に激痛を伴う苦しいものでした。この時お世話になった延長器具が、(株)東機質のオーソフィックスでした。手術は無事成功し、日を追うごとにその痛みにも慣れ始め、順調な入院生活を送るようになりました。しかし、傷口が治るにつれその箇所がかゆくなり、夜中のうちに無意識にかきむしってしまうということがあります。そのために、しばしば足に雑菌が入り、いつもボルトと傷口の間を注射器で洗浄してもらったり、点滴をしてもらったり、こまめに包帯やガーゼのつけ替えをしてもらったりと、両親を始め家族全員に心配をかけてしまいました。長い入院生活のためか、もしくはちょうど成長期であったためか、私はその当時最高の8cmという延長記録を作ることになりました。

しかし、裏を返せばそれだけ足の長さが異なっていたということであり、当時非常に歩きにくかったことを思い出しました。装具や外靴自体にも足の長さを調節するために補だかをつけて歩いていました。それによって歩きやすくなりましたが、道路などに少しでも段差や出っ張りなどがあるとその外靴が原因で転倒する恐れがあったので、常に注意して歩くことを義務づけられ、いつも安静にしておくことが必要とされてきました。退院した時にそのことを思い返し、それが活発な私にとっては一番つらかったのだと気づきました。手術によってそれが改善され、先生や、そしてオーソフィックスを輸入販売されている(株)東機質にも感謝しています。

中学校に入学した私は、中学2年の時に初めて塾に通いたいと親に相談しました。その塾とは、勉強面に関する塾ではなく心身を鍛えるための塾で、友達と一緒に少林寺拳法に週3回通い始めました。最初は体力も友達と比べると全くなかったのですが、1ヵ月、2ヵ月と練習を積み重ねていくうちに、わずかながらでも慣れていきました。そして同じ道場の先輩や同級生たちにいつも親切丁寧に礼儀作法から道着のたたみ方まで教えてもらい、また師範やその家族の方にも私の足のことや健康について細かな配慮をしていただきました。当時は本当に道場に通うことが楽しくて、充実した日々でした。

仮骨延長手術



私はみなさんの温かな思いに守られて、一つの節目でもある黒帯、つまり初段までなることができました。この貴重な体験が私の中で大きな自信となり、今も私という人間を形成する一つの核となっています。

私はいつも自分がなんら健康者と変わらない人間であると思っています。ただ、私には少し普通の人よりもハンディがあるというだけのことです。私は「すべては自分自身の持つ“一念”で、その人の置かれている環境や生活を変えていける力を持っている」と確信しています。そのように思うことで、挑戦する気持ちや自分に負けたくないという気持ちを心から目覚めさせ、生きていく中ですべての局面に対して“勝つ”ことができる人間になれると思っています。だから、私はこの思いをいつも胸に秘め、みんなに私の生き方を示すことで、“誰もが必ず持っている無限の可能性に気づいて欲しい”と願っています。

今までの大小様々な手術を通して私の最も改善されたところといえば、ぱっと見て足だと誰しもが思うかもしれませんが、私自身は気持ちの面でとても大きく変わったと思っています。そして、すべてにおいて前向きであり楽観思考でいられるようになりました。自分が諦めない限り、失敗しても何度でも繰り返し挑戦することができると改めて確信しました。そして、両親には私を産んでもらったことに感謝し、また私をいつも支え応援し、温かく見守ってくれたすべての方に、今も“ありがとうございました”という気持ちを強く持っています。

私は現在大学生になり、とても充実したキャンパスライフを送っています。しかし、以前から私の考えであった左足の最後の手術、足の延長手術と左足の足首を作るという今までで一番過酷になると思われる手術を、今年の4月から約1年間休学して挑戦するつもりです。それにより、私が誰かを勇気づけたり、励ましたり、元気づけたりすることができれば、これほどの幸せはないと思っています。

今回このような誌面をお借りし、体験談を掲載させていただきましたことを大変感謝しています。今後も(株)東機質のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

光に誘われてカイルス巡礼

青木 新門

昨年の夏、チベット高原を旅してきた。

自分でもなぜそんなところへ行ったのか不思議に思っている。

昨年の5月に歯が痛くなり、かかりつけの歯科医院へ行ったところ、写真家でもある友人の歯科医から「カイルスへ行かないか」と誘われ、即座に「行く」と応えたのだった。カイルスと聞いたとき、一瞬カイルスって何だと思ったが、次の瞬間冠雪の霊山が脳裏に浮かび、その霊光に導かれるように即答してしまった。

私の脳裏にカイルスが浮かんだのは、今から30年も前にその山の写真を見たことがあって、そのイメージが脳裏に残っていたからに違いない。30年前の私は、ひよんなことから葬儀社に就職し、死体をオ棺に収める納棺の仕事を専門にしていたことがある。そんな死者と毎日接する仕事をしているうちに「人は死んだらどこへ行くのだろうか」と真剣に考えるようになっていた。そのころ出遇ったのが『チベットの死者の書』だった。この本を読んだとき、人の死後の世界を最も正確に描写していると思ったものだった。そして夢中になって読み、関連の書物を読むうちに、カイルスの写真の載っている書物に出遇ったのである。

カイルス山と、その山系から流れ出た川が注ぐマナサロワル湖のある地は、古来から仏教、ヒンズー教、ジャイナ教、そしてチベットの古代宗教であるボン教の最高の聖地とされてきた。仏教徒はカイルス山を仏教宇宙観の中心にそびえる須弥山しゆみせんのモデルとみなし、山頂で今もブッダが法を説いていると信じられている。またヒンズー教徒にとってカイルス山はその山頂の形をシヴァの象徴リンガ(男根)とみなし、シヴァ神の清む聖なる山であると信じている。ジャイナ教では初代教祖が悟りを開いたところとされ、ボン教では開祖のシェンラブ・ミボが空から降り立ったところとされている。

また今日のチベット仏教徒は、聖なる山カイルスは観音菩薩の化身と信じていて、亡命したダライ・ラマの写真飾ると中国当局から罰せられるので、代わりにカイルスの写真を飾っている。私は、この霊山のことを書物で知ったとき、インド人やチベット人が古来より熱烈な信仰の対象としてきた不思議な山をこの眼で見てもいたものだと思った。

そんな思いが、誘われたとき即座に「行く」と私に言わせたのかも知れない。しかしいざ行くことを決めてチベットの旅行記などを讀ん



でみると、とても私など行けるところではないような気がしてきた。

カイルスは、チベットの首都ラサから西へ直線で1000kmのところにある。直線で行けるはずがなく、平均で標高4000m以上という高地の曲がりくねった道なき道を行くわけで、実際は2000km以上の道のりである。その上カイルスの巡礼道は標高5000mの高地で、カイルス山の北面に出るのに25kmも徒歩で進まなければならない。あのネパールからヒマラヤ越えをしてきた河口慧海氏でさえ、カイルスを一周するときヤクの背にのっけていても心臓が張り裂けそうに苦しいと『チベット旅行記』に書き残している。また色川大吉氏が私と同年の65歳でチベット旅行をしたことを知り、氏の旅行記を読んだ。ところが、その本に「カイルスに死なず」と副題されているように、氏は途中で高山病にかかり、カイルスのベースキャンプで完全にダウンしてガモバック(※1)に入って九死に一生を得て帰還していた。あの世界各地の高地を探検した人物が、である。

私は心配になった。登山の経験もなく、日ごろ駅の階段を息切れしながら上がっているのが実態である。念のために人間ドックで診てもらったら、血糖値が高く、完全な糖尿病だと診断され、5000mの高地など医師として許可はできかねると主治医は断言した。どうしようかと迷った。最初10人ほどの参加希望者があったのに、日が近づくにつれ3人になっていた。地方紙の新聞記者に「なぜそんなところへ行くのですか、山があるからですか」と聞かれ、「いや、光が招くから」と言ったらそのまま記事になっていた。私は行かざるを得なくなった。

*

そんな私が、カイルスの北面が見える地点に立つことができたのが不思議であった。実状はダウン寸前のふらふらの状態で到達であったが、とにかく目的を達した。そしてチベット高原を縦断してカシュガルまでの4000kmの旅を高山病になることもなく終え、ウルムチ経由で帰還したのだから幸運と言うしかない。

この世には実際現場に立ってみて初めて知ることがある。チベットは1950年10月の中国人民解放軍の侵攻以来、国の形がなくなってしまう。そして「近代化」のスローガンのもとに中国化が

青木 新門 / あおき・しんもん

1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退後、富山市で飲食店「すからべ」を経営する傍ら文学を志す。73年、冠婚葬祭会社(現オークス株式会社)に入社。93年、葬式の現場での体験を『納棺夫日記』として著し、ベストセラーとなる。現在詩人としても活躍。日本文芸家協会会員。著書に、『納棺夫日記』、『柿の炎』、随筆集『木漏れ日の風景』、詩集『雪道』など多数。

(※1) 高山病の治療に使われる携帯用の気圧室。

(※2) 仏教徒の礼拝方法の中で最高の礼法であり、両手・両膝・額という身体の5部分を地につけて平伏し、仏や高僧などに礼拝する動作をいう。

(※3) 『大無量寿経』にある言葉で、釈迦の顔が光に輝きその姿は清らかに輝いていたという意味。親鸞の思想の中核をなし、聖書のルカ伝やマルコ伝にも同様の意味の言葉が存在する。



強かに推し進められていた。街の目抜き通りの新しい家並みは中国人移住者が住み、中国語での登用試験採用のため、軍隊、官庁、商社なども中国人が独占し、チベット人は場末へ追いやられていた。出会ったチベット人たちのやさしい笑顔に深い悲しみの陰影が漂っていた。

私はそんなチベットの現状を見ているうちに、『ヴィタリテ』に連載しておられる奥村一郎氏の著書『祈りの心』に引用されていたパスカルの言葉を思い出していた。

「小事に対する人間の敏感と、大事に対する無感覚とは、奇妙な転倒をなしている」(パスカル『願望録』より)

パスカルの言う小事とは世事のことで、大事とは信仰のことである。蓮如も「後生の一大事」という言葉を『白骨の章』で残している。五合庵に住み、村の子供と碁をついて仏道を生きた良寛などは、小事に無感覚で、大事に敏感であったのかもしれない。

チベットの人々は自国を仏国土とみなし、信仰こそ大事であって、生活の向上などは小事とみなしていたようである。そのことが、近代化を急ぐ中国政府との軋轢の最大の原因になっているように思えるのだった。大事の捉え方が根本的に違うのである。

私はそんな思いを抱きながら、カイラスを目指した。ベースキャンプから巡礼道を歩き始めると、それこそ胸が締め付けられるように苦しくなると、2、3歩歩いては立ち止まって深呼吸をしながら歩いていた。チベットの巡礼者たちは、五体投地(※2)をしながら私を追い抜いてゆく。私は唖然として立ち止まったとき、ふと八木重吉の詩を思い出した。

かなしみとわたしと

足をからませて たどたととゆく

かならずや

ひかりの世界があるだろう

そして今にも倒れんばかりになったとき、カイラスの北面が見える地点に来ていた。崩れるように座り込んで見上げると、眼前にカイラス山が超然と聳えていた。その姿をあえて言葉にするなら、姿色清淨にして光顔巍巍(※3)といった表現が最もふさわしいように思えた。私はしばらく感動の中に座っていた。

やがて興奮が静まると、私は過去に葬式の現場で見た蛆虫の光や蜻蛉の光や死者たちの顔に見た微光のことを思い出していた。あの光に出遇って私は『納棺夫日記』(文春文庫)という本を著したのだった。あのとき垣間見た光も、このカイラスの霊光と同質の光のように思えた。旅立つ前に「光が招くから」と言ったのも、その光と光がつながっているような気がしたからだった。

登山家が危険を冒して何度も山に登るのは「そこに山があるから」ではないと思う。山頂で霊光に包まれた感動の体験が再び行動をうながすのである。「そこに山があるから」といったのはイギリスの登山家ジョージ・マルローだが、いかにも人間が自然を対象化し征服してきた西洋近代人らしい言葉である。

私の言う光のイメージは、キリスト教では霊性(Spirituality)のことであり、仏教では仏性のことを言っている。しかしこうした体験でしか得られない神秘的な霊性や仏性は、非科学的と近代は完璧なまでに無視してきたのである。

私は、カイラスの巡礼道を仏教徒もヒンズー教徒もジャイナ教徒もボン教徒も仲良く一緒に巡礼している姿を見ながら、これらの宗教の根っこに共通の何かがあるからではないかと思った。ダライ・ラマ14世は自著の中で「光は世界の主要宗教すべてに共通するイメージである」と、聖書のルカ伝や仏典に見るイエスやブッダが霊光に包まれた場面をあげて語っている。もし世界中の宗教が共通の光で結ばれているなら、違いを認め合って共生することが可能はずだ。それができたらどんなに素晴らしいことだろうと思ひながら、私はカイラスを後にした。

出会い(25)

カミサマ ゴメンネ

奥村 一郎

いつか、毎日新聞の「にじ」という読書欄に「カミサマ、ゴメンネ」という見出しで投稿された次のような話が折にふれて思い出される。

「4歳になるめいが訪ねてきてくれた。男の子ばかりのわたしの家では、女の子がきてくれて、急に一輪の花が咲いたように楽しい日だった。近くに公園があるので、わたしはめいの手をとって、そこに遊びにいった。ひとしきり遊んだめいと、さあ帰りましょうと手をつなぎ、公園の広場を横切ろうとしたら、すみにお地蔵さんがまつてあった。めいはそれに目をとめて、拜んでいくと言う。とびらが閉まっていたので、そのまま通り過ぎようとした自分が恥ずかしくなった。めいは、その小さい手でとびらをあげ、両手を合わせてなにやら一心に拜んでいる。わたしもいっしょに手を合わせた。『なんと言って拜んだの?』ときいてみると、色の白い、つぶらなひとみのめいは、『カミサマ、ナニモ、モッテコナクテ、ゴメンネ』と言ったんだと言う。わたしは一瞬心を打たれた。神や仏に『こうしてください、ああしてください』と言って、求めることばかり考えるわたしである。お地蔵さんにおみかん一つも持ってこなくてごめんねと言う幼子の心に、『よい子にしてください』と言って頼みなさいなどと、いらぬことを言わないでよかった。もしそんなことを言ったとしたら、こんな清らかな童心にふれることができなかった、思わずその手を握りしめた」(松本幾子)

まさに、みごとな幼子の心! その澄んだ心は百万遍の大人の祈りにも勝る。年齢とともに欲深い願をかけることしか知らない大人の祈りとはおよそ桁はずれの透明な幼子の心の溢れに感動する。どの子供も同じではないとしても(まして、すでに老骨の私のようなものには、残念ながら、そんな美しい言葉は思いも浮かばない)、「童心、天に通ず」とも言われる。事実、それと似た言葉はいくつも聖書や聖典に見られる。

いくつかの例を取り上げてみよう。

「天地の主である父、わたしはあなたをほめたえます。あなたはこれらのことを知恵ある人や、賢い人に隠し、幼いものに現わしてくださいました。そうです。これはあなたのみ心でした」(マタイ11、25 ルカ10、21)



「イエスは幼子と呼び寄せ、弟子たちのまん中に立たせて言われた。“あなたたちによく言っておく。あなたたちは心を入れかえて幼子のようにならなければ天の国には入れない”」(マタイ18、2-3)

さらに、東洋の古典にもそれに関連する意味深い言葉がいくつも見られる。例えば、西暦以前にさかのぼる中国の聖哲、老子の深遠な思想には「嬰兒復帰」という基礎理念が根底にあり(参照『老子』55)、鎌倉仏教の高僧、親鸞上人の「智者遠離」という言葉も、上記の聖書の教えに見事に呼応する(『歎異抄』12)。

現代の人生詩人の中にも幼子を賛美する美しい詩がある。「あそび」と題した北原白秋の詩がある。

あそびこそ尊とかりけれ。
まことよく惚れあそぶもの
神ぞただ嘉したまはむ。
まことにはあそぶ人なき。

身をあげてあそぶ童は
ひたむきに天もわすれぬ、
声あげて惚れてあそびぬ。
その声ぞ 神のものなる。

いと高きころにあそぶ、
そのどよみ天にいたらむ。
あそびこそ尊とかりけれ、
よく遊べ、みほとけのごと。

(北原白秋『水墨集』新潮社)

同じ「遊ぶ」といっても、大人の場合にはよい意味にならない。「遊んでいる」といえば、大人の場合、「働かないでブラブラしている」とか、昔の「遊郭」とか低次元の言葉になってしまう。中次元の場合は、「暇」とか、「空き地」のような場合に用いられる。

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンツ宗教研究所）など多数。

子供の場合には全く違う。「よく学べ!よく遊べ!」と励ます言葉になる。つまり「頭も体も元氣になれ」ということ。「心身一如」という仏教語にさえない。

神と遊べる特権は子供にしかないかのようにである。大人になってしまくと、神様とのつきあいが下手になり難しくなってしまう。この世のことがかりに身も心も奪われてしまうためなのだろうか。情けないこと。悲しいこと。それについて、とてもよい詩をいくつも残してくださった高田敏子さんの一つの詩がある。

祭り

「あれ なにに？」

「おみこし」

「おみこして、なにに？」

「神さまのお乗りもの」

「神さまって？」

さあ、なんとこたえましょ

とにかく

神さまは子供がお好きで

子供はお祭りが大好き

きょうもどこの町では

晴れ着をきた子供たちが

神さまと遊んでいる

神さまは肩のはる大人との

おつきあいから解放されて

雲よりおいしい綿菓子で

なめていっちゃうにちがいない

(高田敏子『高田敏子詩集Ⅰ』花神社)

P.G.I.のお知らせ

■ 三好耕三 写真展 「櫻」

Kozo Miyoshi "SAKURA"

4月1日(火)

— 25日(金)



■ 奈良原一高 「天」 Ikko Narahara "HEAVEN"

5月8日(木) — 30日(金)

■ 常設展 Edward Weston

6月4日(水) — 27日(金)

* 休館のお知らせ 4月29日～5月5日まで休館致します

フオ・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分

【営業日】 月～金 11:00～19:00 【入場無料】

【休館日】 土・日・祝日

* P.G.I.についての詳しい情報はホームページ (<http://www.pgi.ac>) をご覧下さい。

表紙の言葉



写真: フランコ・メン
ペンシャール、パキスタン 2001年

子供を運れたアフガン女性、市場にて
2001年4月

「…その気にならなければ女性の姿は目にとまらない。その衣装は、歩き方と同じく、目につかないためのものなのだ。 おもしろいことに、ブルカを着ている女性は、ベールをかぶっている女性よりも自由闊達に歩く。ブルカは頭から足の先まですっぽり包む。頭部を完全におおって、目のところだけアミ状に小さくあけ、身体にまわりつき、歩くとき風にたびく。 そのなかで女性はまったく別の世界にいる。眺めているのは女性の方だ。彼女は人に見られないし、実際目にとまらない。…」

『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング (晶文社刊) より

“Der Mensch in der Mitte”

人が中心

—「神経繊維腫症」の治療を通して思うこと—

米川 泰弘

ヨーロッパのほぼ中央に位置するこの国スイスで働いていると、実に様々な国籍、人種の人が患者や仕事の同僚であったりする。ある日の例を挙げると、午前中はスイス人の患者をリトアニア人の医師を助手に、クロアチア人の麻酔医とフィリピン人の器械出し担当のナース（2人とも既にこのシリーズで登場）と一緒に手術した。午後は私の外来診察日なのでそれにあたっている最中、前日イタリアから来た患者の容体が悪化し、緊急手術となり再び手術室へ。手術室から戻るとそこにはオーストリアからの患者が写真を携えて診察を待っていた、という具合である。こういう日常であると、自ずと相手がどこの国の人かということはあまり意識しなくなるし、重要でもなくなる。どこからであろうと“人間”その人が私を訪ねてきて、私の治療を信頼してくれるというのなら、ベストを尽くすのみである。一人でも多くの患者さんが、一日でも長くよいQOL（生活の質）で過ごせるようにできるだけの力になることが、私に与えられた使命だと認識している。手術の際は、経験を重ねてはいても、未だになんともっと手技を工夫洗練できないものかと考えながら行っている。

日本の病院の外来はよく“3時間待って診察3分”などと揶揄されるが、そのような流れ作業はこちらでは考えられない。予約にはかなりの順番待ちがあるが、さて診察となると、正確な神経学的所見を得ることや患者の話を聞くこと、及び病状や手術についてよく理解、納得してもらうようにできるだけ時間をかけている。今後の治療方針やQOLについては、本人の意思も尊重してよく話し合う必要がある。診察にこのように時間をかけると、患者の顔や名前、ときには生活環境まで覚えてしまい、例えばの話だが、「患者取り違い事件」「間違った側の開頭術」などの重大ミスもまず起こらないわけである。

さて外来診察の際、とりわけ十分な時間をとる必要と、患者との意思の疎通に大きな忍耐を必要とする深刻な病気がある。それは「神経繊維腫症」で、遺伝的に発症する場合が多い。病変が主に皮膚に現れるⅠ型（治療は主に皮膚科）と、神経系に現れるⅡ型（脳神経外科の領域）とがある。後者の場合は神経系組織に次々と神経繊維腫、神経鞘腫^{しやうしやうしゅ}、髄膜腫、脊髄腫瘍などの腫瘍ができてくるのである。比較的良性的な腫瘍ではあるのだが、ただ宿命的なことに、1つの腫瘍を摘出しても時間差攻撃のようにあとからあとから腫瘍が発生して、その度に大切な機能が損なわれたり欠けてゆき、重大な



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。

京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

チューリッヒ大学病院 <http://www.usz.ch/>

障害が積み重なっていく。肉体的なこのつらさに加えて、精神的にも度重なる摘出手術と入院の繰り返しという試練に当事者は落胆し希望を失っていく。悪性脳腫瘍グリオブラストーマ（43号参照）のような差し迫った命の終末を間近にした診療の場合とはまた違った意味で、担当する医師にとっても最もつらい病気の一つである。

例えば現在26歳の主婦の場合、聴力がどんどん落ちてきたことからこの病気が判明し、その原因である聴神経腫瘍を8年前に摘出した。次には頸髄にできていた腫瘍が大きくなり歩行障害がひどくなったので3年前にこれも摘出した。その後男児を出産したが、今度は視力がだんだんと衰え一眼失明の危険が出てきた。そこで頭蓋内のあちこちにできている髄膜腫のうち、視神経近くにあつて視力低下の原因となっている髄膜腫を摘出した。いずれの手術時も、大切な聴力、歩行、視力と関係の深い神経組織に触れるので、細心の注意を払って手術にあたった。また、術前にはその危険を十分に患者と家族に知っておいてもらって手術に臨むのである。ちなみに聴力に関しては、本疾患では聴神経腫瘍が多くの場合両側にでき、非常にデリケートな聴神経を侵してしまうので、摘出手術をしてもしなくても早晩聴力は失われてしまう。ただし、腫瘍が大きくなると小脳と脳幹が圧迫され生命に危険が及んだり、極度に平衡機能が侵されるので摘出手術は必要である。近年、このような聴力喪失者のために耳鼻科と共同で行う手術で、脳幹の蝸牛神経核に電極を挿しこみ他端を耳の後ろの皮下に埋め込んだ集音器に接続し、ある程度会話を聞き取れるようにする補助装置が開発された。これまで数例で試みたが、まだ完全に納得のいく成果は収めていない。

たまたま私の娘の同級生の兄である32歳の男性患者は、さらに極端な例である。12歳のときに発症し、私の前任であるYasargil教授によって胸髄の髄膜腫の摘出手術がなされたのが最初で、その後は私が引き継いだ。眼窩の髄膜腫、頸髄の髄膜腫、両側の小脳橋角部の髄膜腫、神経鞘腫と、今日まで10回以上の大きな手術が必要であった。身体障害も進み一眼失明した上に歩行もできなくなっている。今回の入院は、夜間の呼吸困難の原因となっている脳幹部腫瘍の摘出のためであった。非常に大きな家族の愛に支えられつつ、人生のほとんどを病と闘わなければならない彼の現在の唯一の楽しみは、口から物を食べてその味を楽しむことだけなので、



雪のチューリッヒ大学本部と連邦工科大学（ETH）本部
病院の建物から中庭を隔てて臨んだもの

手術の際物を飲み込む機能だけはなんとか残して欲しいとのことであつた。両側の聴力も既に喪失しているので、筆談と母親の助けによる彼の意思伝達である。退院時には夜間の呼吸困難は取り除くことはできたが、栄養補給のためのPEGゾンデ（胃瘻）はまだ保持したままになった。しかし転院してこれからリハビリをすれば彼の希望はかなえられる見通しである。

したがって、本症を治療するにあたって最も問題になるのは、QOLの立場と症状の進行度を慎重に比較考量し、どの時点で手術に踏み切る決断をするのかということになる。患者との対談、治療にあたる医師の経験に基づくアドバイスが、できるだけ長くよいQOLを維持するための非常に大きなファクターになるのである。下部脳神経（物を飲み込む、声を出すのに最も重要な神経）の障害で患者の声はかすれて発音が明瞭でない場合も多く、聴力喪失や減退でこちらの言うことも十分に伝わらないので、外来での定期診察のときは筆談になる。次々にできる腫瘍の増大傾向を追跡、観察し続けて、そのどれかに症状を現わすような変化が少しでもあれば、手術も含めて次の手立てを考えなければならないので、検査にもかかなりの時間をかけて注意深く行う。

先日、ドイツのさる大学の脳神経外科教授定年退官に伴った後任教授選考会のただ一人の学外委員を私が仰せつかった。書類（候補の経歴や発表論文）をもとにすべてのプロセスが非公開で行われる日本とは異なり、こちらでは候補者たちが公開で講演し、質疑応答を受ける機会がある。いまや8人に絞られた有力候補の講演が行われる日に、しばし日常の仕事から離れ、その歴史ある大学都市へ向かった。2日間の滞在中、趣ある古い街並みを散策する時間もほんのわずかに見出せたが、もちろん主目的は講演を聞き、その後の選考会に参加して所感を述べることである。その中で、この病気をテーマにして講演した有力候補がいた。神経の再生に関する基礎的な研究、腫瘍摘出のための外科手術技術、発症に関する分子遺伝学における最近の知見を含んだ広範な分野を包摂した見事なものであった。教授として選ばれるのに十分ふさわしい内容と評価できたが、さらにそれだけでなく最終選考段階では臨床家として特に大切な要素、人物や人格についても細かく検討されるのである。

さて、今回のテーマの“Der Mensch in der Mitte”である。これに関しては『ヴィタリテ』掲載の前回のシリーズ（14～17号）でも述べたのだが、時を経た今も毎日切実に感じていることなので、再度手短かに紹介したい。これは私が着任したとき本大学病院案内のパンフレットの表紙にあつた言葉で、“人を大切に”“人が中心”というような意味である。当時この“人”という言葉を巡って、病院の運営幹部と対話した。私は「人」というのは患者のことだと思い込んでいたのだが、彼は、病院に働く人も含めてだと迷わず言うのである。着任早々の日本人としてはこの感覚には多少抵抗があり、どうして患者のみでないのか不思議に思った。ここで長く働いた今では彼の言うことが理解できる。医師が忙しすぎて時間的、心理的、体力的に余裕がないと、患者に対して配慮のある対応、よい治療はできないということは確かである。言いかえると、治療にあたる者、看護にあたる者が非常に疲れていたり、悪条件で働かなければならないということでは、（医療事故などにつながりこそすれ）質の高い医療は達成できないということである。この事実、今回取り上げた疾患の患者たちと、その長期にわたる家族をも含めた闘病におけるQOLを考えるときに、特に実感として迫ってくるのである。塩野七生氏の『ローマ人の物語』にも、ローマ帝国がどうしてあのように強大になり長く続いたかという要因に、兵を十分休ませ満を持して戦闘にあたらせたことが述べられている。どんなに精鋭で勇猛果敢な兵を抱えていても、彼らをとことんまで消耗させてしまえば、戦いに勝つという目的が達せられないことをローマ人はよく知っていたのである。最近、助手及び病棟主任の身分の医師はその勤務時間を週50時間以内と定める、という通達が届いた。それ以上働かせた場合、その科の長に法的責任を問うという厳しいものである。この通達に、最初は“なんと理不尽な。オフィス仕事ではないのに。一番修練を積みなければならない時期の身がそんなことでよいのだろうか”と思った。しかし、現実にはその実践への助けとして助手の定員を増やしてくれたりしているのを見ると、ヨーロッパ人の考え方の根底を垣間見た気がした。医療の改革を考えるとき、患者にも治療や看護をする者にも等しく人間性を尊重した質の高い医療を目指すなら、ただ「医療費はできるだけ安価に」という考えを掲げるだけでは成り立たないのだと思う。

ブルゴーニュの たっけい 巨石とキリスト磔刑像

ジャン・コラルド

遠く新石器時代から、私たちの大地のいたるところで、人々は地面から石を掘り出し、それを天に向けて立てようとしてきました。できるだけ手ごろな石を積み上げることから始まり、紀元前2000年代からは巨大な岩石の塊を用いるようになりました。これらの岩石は、学術的には“Mgalithes”(メガリット)と呼ばれ、巨石記念物を意味します。

フランスでこういった遺跡が一番多く見受けられる場所は、ブルターニュ地方です。特に、有名な景勝地カルナックには、1,169個の“MENHIRS”(メンヒル)が11列に並んでそびえ立っています。今日、次のような記念物を意味する名称はブルトン(ブルターニュ)語を起源としています。メンヒルは直立に置かれた石を指し、“DOLMENS”(ドルメン)はテーブルの形に水平に置かれた石を指します。ブルトン語で“Men”(メン)は石、“Hir”(ヒル)は長い、“Dol”(ドル)はテーブルを意味します。私たちの地方ブルゴーニュは、ブルターニュほどこの種の記念物が豊富ではありませんが、過酷な気候や後の世代の破壊行為を免れた記念物がいくつか残っています。ソーヌ＝エ＝ロワール県のクーシュ近郊を訪れば、エポワニーの5つの巨石を目にすることができます。また、オート＝コート＝ド＝ニュイを見おろす森に囲まれたテルナン村にもドルメンがあります。

ところで、メガリット消失の主な原因は、パガニズム(異教)(※1)の痕跡をすべて消し去るという使命にとりつかれた、初期のキリスト教伝道者たちの盲信にあります。658年にナント公会議は、人民が崇拝していた記念石を汚す決定を下しました。789年には、シャルルマーニュ皇帝が記念石の破壊を命じました。とはいうものの、彼は私たちにコルトン・シャルルマーニュという銘酒を残してくれましたので、この偶像破壊行為は許してやることにいたしましょう。

私たちの祖先の石に対する信仰は、聖書のお話を通して私たちに伝えられている信仰に近いものでした。聖書には、「アブラハムは石を立て、祭壇とした。ヤコブは石を立て、祭壇とした……モーゼは石を立て、祭壇とした」とあります。しかし、伝道者である農村の修道士たちは、こういった原始的な建造物を悪魔の仕業としか見なませんでした。ただ、最も巨大な石は破壊者のハンマーをものともしませんでしたので、彼らはそういった巨石をキリスト教に改宗させることを企てました。その方法は、十字架から始まり、聖者の像、聖母マリアの像と、キリスト教徒の印を石に刻むことだったのです。

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニュー＝サン＝ジョルジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



てっぺんがキリストの十字架像の形に切り取られたメンヒルもいくつかあります。こうしてメンヒルを改宗し新たに使用することには、新カトリック改宗者(※2)、彼らが習慣として信仰を実践していた礼拝の場に引き留めるという利点がありました。それらの場所は、地球放射がよい影響をもたらすため気象環境がよいと見なされていました。こういった信仰ならびに、地方の慣習や伝統を継承しようとする気持ちから、礼拝堂、教会、大聖堂の建設者は自分たちの建造物を古代の神殿があった場所に建立するようになったのです。その結果、初期の礼拝堂は巨石と共存することができました。また、5世紀までには教会の身廊とは分離された建造物であった鐘楼も、これと同じ建築上のビジョンに基づいて建造されるようになったようです。

村で最初の石の建造物はおそらく教会でした。一般に家というのは木の骨組みでできていて、それにわらを混ぜた粘土の壁を加え、麦わらで屋根を葺いたものです。平野ではこういった建築方法が一般的でしたが、私たちの丘陵地帯のドウ栽培者たちは石に恵まれていました。丘の斜面には地表に頭をのぞかせた建築用の石や、屋根を葺くのに用いられる“laves”(板石)と呼ばれる大きな平たい石がふんだんにあったのです。

教会とその鐘楼は村の中心に、そして神のご加護を受ける拠り所となりました。キリスト教信者たちの願いはただ一つ、自分の魂が確実に天に直行できるように、教会の地中に埋められることでした。彼らの魂は天に昇ったとしても、それが離脱したばかりの哀れななきがらは、その安息を祈るためにきてくれた信者たちを不快にさせるにおいを発散しながら分解します。その結果、人々は故人を教会のまわりの空き地に埋葬することに同意せざるを得なかったのです。そして彼らの魂に神のご加護を保証し家族を安心させるために、キリストが人々を救うために耐え抜いた受難を思い起こさせる磔刑像を、墓地のまん中に建てることにしたのです。

このキリスト磔刑像は古代のメンヒルのそばで見つかることもあります。そのような場合はきまって、双方が同じ役目をもってたことをうかがわれます。たとえば、道の境界線を示したり、古代の神殿の跡を示したりすることです。侵略や宗教戦争のために消失してしまった教会や礼拝堂の跡地には、よくこれらの目印が見受けられます。カトリックの磔刑像は、プロテスタントから奪回された領地の目印と

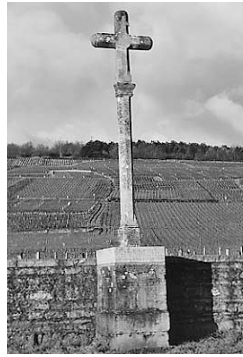


なることもよくあるのです。

敵を国境ではばみ、平和を取り戻したキリスト磔刑像は、1789年のフランス革命で新たな試練を迎えました。この革命により、旧体制を思い起こさせるすべての宗教的シンボルの破壊命令が下されたのです。農民は当局の命令を履行するのにそれほど熱心ではありませんでしたので、都市から愛国派の集団が送り込まれ、あの略奪、破壊行為が行われたのです。それはまるで、古代のメンヒルに対して初期のキリスト教徒がやっていたのと同じような破壊行為でした。しかし農村の人々は自分たちの新しい信仰のシンボルに愛着をもっていましたので、キリスト磔刑像を分解して地中に埋め、革命の熱狂が鎮まった後に組み立て直すということがよくありました。

革命の動乱の後、キリスト磔刑像は自らの居場所を再び見出すことができました。キリスト磔刑像もまた領地の境目を示していましたが、市町村の境にある最も古いものなどは旅行者の目印の役目を果たしました。たとえば、テンプル騎士団(※3)の十字章やサンチアゴ＝デ＝コンポステラ(※4)への巡礼者の貝殻(※5)がかたどられたいくつかの記念物がこのことを証明しています。ごく最近の19世紀から20世紀初頭にさかのぼるものは、台座に彫られた碑文が示しているように、概して祈願成就や家族の記念日を期して信心深い人が建てた奉納用の十字架です。ヴォージュ＝ロマネにあるキリスト磔刑像の場合は、その名高いドメヌ、ロマネ＝コンティのブドウ畑を見守っています。この碑文が彫られた四角形または円形の板石の上に載っている台座は、花や供物を載せることができ、ときとしていけにえの祭壇を思い起こさせるようなさらに幅が広い板状の石が載っていることがあります。昔は、十字架が建てられるときには、主任司祭がそれを祝福するために行列を組織し、ひざまずいて祈りを捧げました。現在の教区民はみなこれになっているのです。

20世紀の初頭まで、キリスト磔刑像は、“Rogations”(豊作祈願祭)のために行われた行列行進のゴールの役目を果たしていました。この祭りは、主の昇天の木曜日に先立って3日間行われる宗教上の祭典です。この機会に人々は集まり、行列をなして賛美歌を歌いながら、五穀豊稔を神に祈り、動物や作物を脅かす病気や悪天候を追ひ払います。庶民の知恵によれば、月曜日は干し草、火曜日は穀物、水曜日はブドウについて収穫期の天候を予測するための日と



いうことになっています。水曜日に雨が降ったときは、ブドウ栽培者たちは賛美歌を歌うことはせず、真剣になって守護聖人の連携(※6)を唱えました。こういった信仰の実践も、ローマ人が以前行っていた信仰に端を発しています。彼ら自身も母なる大地を崇拝するさらに古い伝統からそれを受け継いできたのでした。

今日では、私たちには技術という素晴らしい力がありますので、祈願したり、感謝したりする必要はなくなりました。とはいえ、私たちのブドウ畑のはずれにそびえ立つあの十字架は、天と地(土)の結びつきを象徴しているのです。“terre”(土)という語は、日本語の漢字で「土」と書きますが、これは私たちの十字架像を連想させる表意文字といえます。この十字架像は天に向かって伸びる腕でもあります。詩人のアルフォンス＝ド＝ラマルチヌ(※7)が、『瞑想詩集』の中で次のように描写しているのとおり、私たちはその天に郷愁の念をもっています。

人の資質に限りあるも人の願いに限りなし
人間なるもの記憶にある天から落ちし神なり

- (※1) 特に古代ギリシア＝ローマの多神教を指す。
- (※2) ナントの王令廃止時(1685年)に強制的にカトリックに改宗させられたプロテスタント
- (※3) 第一回十字軍(1099年)以降現れたキリスト教武装修道会の一つで、聖地の守護と、領地を通る巡礼者たちの警護に当たった。
- (※4) スペイン北西部の町。使徒ヤコブ殉教の地といわれ、エルサレム、ローマと並ぶキリスト教三大巡礼地の一つ。
- (※5) 杖やそれにつるすようなとともに、巡礼に必要なアイテムの一つ。
- (※6) 司祭が先唱し、信者が答えるカトリックの祈りの形式
- (※7) 1790～1869年。詩人、政治家。『瞑想詩集』によりロマン主義の旗頭となる。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュへいらっしゃいませ。なか。
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの豊々、
中世そのまの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力と「はだかぬもり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株) 従事部会事務局 担当：岩沢
Tel 03 3582 5087

